29th Nagoya Classic Festival 2011

第29回 名古屋クラシックフェスティバル

イタリアの最高峰が
当代一流の指揮者
パッパーノとともに

リムスキー＝コルサコフ／
交響組曲「シェヘラザード」
チャイコフスキー／
交響曲 第6番「悲愴」

アントニオ・パッパーノ 指揮
ローマ・サンタ・チェチーリア 管弦楽団

2011
10.1（土）
PM2:00開演

愛知県芸術劇場コンサートホール

S￥22,000　A￥17,000　B￥14,000
C￥11,000　D￥ 9,000　学生￥3,000（税込）

5/28（土）AM10:00～発売開始！

お問合せ お申込み 中京テレビ事業 ☎052-957-3333
〒460-8613 名古屋市中区錦3-15-15 CTV錦ビル6F（月～金 AM9:30～PM5:30／土・日・祝日休業）
インターネットからでもお申込み頂けます。 http://cte.jp 中京テレビ事業 検索

チケット販売所

チケットぴあ （Pコード 133-125）	0570-02-9999	栄プレチケ92	052-953-0777
愛知芸術文化センタープレイガイド	052-972-0430	中日サービスセンター（中日ビル1F）	052-263-7282
ローソンチケット（Lコード 41047）	0570-084-004	イープラス	eplus.jp 他

学生券 ご希望の方は往復ハガキに、希望公演名、公演日時、住所、氏名、年齢、電話番号、学校名、学籍番号を明記の上、中京テレビ事業「学生券」係までお申込みください。公演の3週間前に抽選の上、お席をお取りできるか否かご連絡致します。往復ハガキ1枚につき、1公演1名様でお願い致します。

●曲目等変更になる場合がございます。あらかじめご了承ください。　●未就学児童のご入場はご同伴の場合でもお断り致します。

主催／中京テレビ放送

当コンビは、ラテンの美点に緻密さが加わった、イタリア史上稀なる存在であり、いま世界で聴くべきコンビの筆頭格である。同国随一の交響楽団がもつ高い技倆に、ホットなサウンドと麗しいカンタービレ、そしてオペラを血肉とするパッパーノ一流の詩情豊かで劇的な音楽! 超圧巻の前来日から更に4年の熟成を経た今回、「シェエラザード」では艶美な色彩の饗宴が、CDも鮮烈な「悲愴」では手に汗握る壮絶なドラマが待っている。

アントニオ・パッパーノ（指揮）

Antonio Pappano（Conductor）

アントニオ・パッパーノは1959年12月にロンドンでイタリア人を両親に生まれた。米国で、ピアノ、作曲、指揮法をノーマ・ヴェリーリ、アーノルド・フランチェティ、グスタフ・マイヤーに学ぶ。キャリアの初めからオペラや劇作品に特別の愛情を示した。コレペティートルやアシスタント・コンダクターを務めながら、ニューヨーク・シティ・オペラ、バルセロナ・リセウ劇場、フランクフルト歌劇場、シカゴ・リリック・オペラ等の世界中の歌劇場との関係を瞬く間に築いた。バイロイト音楽祭では「トリスタンとイゾルデ」「パルシファル」「ニーベルングの指環」の上演でダニエル・バレンボイムのアシスタントを務めた。

1987年、パッパーノはオスロ国立歌劇場で「ラ・ボエーム」で指揮者デビューし、1990年に音楽監督に任命されている。この間、コヴェント・ガーデン歌劇場（1990年6月「ラ・ボエーム」）、イングリッシュ・ナショナル・オペラ、サンフランシスコ・オペラ、シカゴ・リリック・オペラ、パリ・シャトレ座、ベルリン国立歌劇場で指揮者デビューを果たしている。

パッパーノは32歳でベルギー・王立モネ劇場の音楽監督に任命された。任期中に「サロメ」「仮面舞踏会」「ニュルンベルクのマイスタージンガー」「カルメン」「オテロ」「ヴェルディ」「ピーター・グライムズ」「椿姫」「トリスタンとイゾルデ」「フィガロの結婚」「バラの騎士」「三部作」「期待／浄夜」「ペレアスとメリザンド」「ドン・カルロ」「アイーダ」等数多くのオペラ制作に携わった。またピアニスト活動も継続し、同劇場のリサイタル・シリーズで多くの国際的歌手の伴奏を務めた。

1993年にウィーン国立歌劇場で、急遽クリストフ・フォン・ドホナーニの代役としてワーグナー「ジークフリート」の新演出を振り注目すべきデビューを果たし、絶賛された。1997年にはニューヨークのメトロポリタン歌劇場で「エフゲニー・オネーギン」の新演出でデビュー。同年、イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団の首席客演指揮者となった。1999年には「ローエングリン」の新演出を指揮してバイロイト音楽祭デビューを果たしている。

パッパーノはまた、オスロ・フィルハーモニー管弦楽団、パリ管弦楽団、リヨン管弦楽団、ベルリン放送交響楽団（現・ベルリン・ドイツ交響楽団）、東京フィルハーモニー、ケルン・ギュルツェニヒ管弦楽団、ラジオ・フランス・フィルハーモニー管弦楽団、シカゴ交響楽団、フランクフルト放送管弦楽団、クリーヴランド管弦楽団、スカラ座管弦楽団、ロサンジェルス・フィルハーモニー管弦楽団、ボストン交響楽団、ロンドン交響楽団、フィルハーモニア管弦楽団、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団等を指揮している。

アントニオ・パッパーノはEMIクラシックス専属の指揮者としてレコーディングを行っている。これまでのレコーディングには「ラ・ボエーム」（エンハンストCD）「ドン・カルロ」「つばめ」等があり、「つばめ」は英国のグラモフォン誌の最優秀オペラ録音賞と年間最優秀レコード賞、フランスのル・モンド・ド・ラ・ミュジーク誌のショック賞と2つのディアパゾン・ドール賞、ベルギーのセシリア賞、ドイツのシャルプラッテン批評家賞、イタリアのムジカ・エ・ディスキ誌賞、米国の批評家賞等を受賞するなど多くの批評家から高い評価を受けた。ディスコグラフィはその他に、ロベルト・アラーニャ、アンジェラ・ゲオルギュー、ホセ・ファン・ダム、クリスティーナ・ガラルド＝ドマス、マリア・グレギーナ、ニール・シコフらとの「三部作」、ロベルト・アラーニャ、トーマス・ハンプソン、パトリシア・プティボンとの「ウェルテル」等がある。2000年9月には、最初にアンジェラ・ゲオルギューやロベルト・アラーニャとマスネ「マノン」を、次にプラシド・ドミンゴやデボラ・ボイトと『ワーグナー：愛のデュエット』の計2枚のディスクをリリースした。2001年7月にプッチーニの『ミサ・ディ・グローリア』をリリースし、ついで11月に、ブノワ・ジャコ監督による新しい映画版プッチーニ「トスカ」のサウンドトラックをリリースした。EMIはまた昨年、ロベルト・アラーニャやアンジェラ・ゲオルギューとの共演によるヴェルディ「イル・トロヴァトーレ」全曲録音や、「ニーベルングの指環」の数シーンを取り上げたワーグナーの2枚目のCDをリリースしている。2003年にはプロコフィエフ「協奏交響曲」をハンナ・チャンとの録音でリリース。パッパーノはグラモフォン誌の2000年度最優秀アーティスト賞を受賞した。

1999年、アントニオ・パッパーノはコヴェント・ガーデン王立歌劇場の音楽監督に指名され、2002年9月に就任。デビュー・シーズンの演目には「ナクソス島のアリアドネ」「ヴォツェック」「ファルスタッフ」「蝶々夫人」「道化師」が含まれている。2003／04年のシーズンには「ドン・ジョヴァンニ」「ムツェンスク郡のマクベス夫人」「ファウスト」「ピーター・グライムズ」を指揮。
2005/06年のシーズンにローマ・サンタ・チェチリア音楽院管弦楽団の音楽監督に就任。

ローマ・サンタ・チェチーリア管弦楽団

Orchestra dell'Accademia Nazionale di Santa Cecilia

ローマのサンタ・チェチーリア・アカデミーに所属する、イタリア初のシンフォニー・オーケストラで、20世紀の傑作を数々初演している。20世紀の初頭から通算14000回にも及ぶコンサートを開き、マーラー、ドビュッシー、シュトラウス、ストラヴィンスキー、ヒンデミット、トスカニーニ、デ・サバタ、カラヤンなどの指揮により、各時代を代表する音楽家たちと共演してきた。

歴代の常任指揮者は、ベルナルディーノ・モリナーリ、フランコ・フェラーラ、フェルナンド・プレヴィターリ、イーゴル・マルケヴィチ、トーマス・シッパース、ジュゼッペ・シノーポリ、ダニエーレ・ガッティ、チョン・ミョンフンで、現在はアントニオ・パッパーノが務めている。レナード・バーンスタインが1983年から1990年まで名誉総裁であった。

1908年から1936年は、ローマ時代のアウグストゥス帝の廟址に建てられたアウグステオ劇場をシーズン・コンサートの本拠地としていた。1958年以降はピウス12世オーディトリウムを公式の会場としてきたが、2003年2月にレンゾ・ピアノ設計による新設の複合ホール、オーディトリウム・パルコ・デッラ・ムジカ（音楽の公園）へ完全に移転した。伝統的なコンサート・シーズンには、しばしば合唱団も伴い、18世紀から現代に至る主な交響楽作品、合唱付管弦楽作品を取り上げている。さらに、外国からも定期的に招かれている。とりわけ、サンクトペテルブルク白夜祭や、イタリアのオーケストラとして初めてロンドンのプロムス（100周年記念）に招かれたことは特筆すべきである。チョン・ミュンフンの指揮ではスペイン、ポルトガル、ベルギーを訪れ、1999年11月にはロンドン・ロイヤル・フェスティヴァルホール公演で大成功を収めた。2001年にはベルリン・フィルハーモニー・ホール（イタリアのオーケストラとして歴史上初めて）やイスタンブール音楽祭、スペインのサンタンデール音楽祭に招かれ、国際的名声を確固たるものとした。また、東アジアへのツアーも1997年、1998年、2000年、2001年（「日本におけるイタリア年」）に行い、2003年にはブカレストのエネスコ音楽祭、バレンシア秋の音楽祭に出演。2004年春にはケルン・トリエンナーレに出演。12月17日にはヴェネツィアのフェニーチェ劇場再建コンサートで演奏した。このほか、イタリア国内の音楽祭（トリノの9月音楽祭、シエナ音楽週間、リミニのサーグラ・マラテスティアーナ）に毎年のように出演している。

1950年代の数々の歴史的録音を経て、近年、メジャー・レーベルに数多くのレコーディングをしている。宗教曲では、記念の年にチョン・ミュンフンの指揮でドイツ・グラモフォンに録音したフォーレとデュリュフレのレクイエムのCDがディアパゾン・ドール賞を受賞したほか、シャルパンティエ、モーツァルト、ペルトのテ・デウム、ソプラノのカルメラ・レミージョとのヴェルディの宗教曲などがあり、バカロフのミサ・タンゴはグラミー賞にノミネートされた。最新盤は、チョン指揮ドイツ・グラモフォンからのイタリア・オペラ名曲集。